

エリオット理論の基本

株式会社 エフ・エリオット
テクニカル・ストラテジスト
藤原尚之
メール：fujiharan@f_elliott.dom
ホームページ：www.f_elliott.com
電話 03 - 3755 - 5506

1.(概要)

1934年ごろにラルフ・ネルソン・エリオットは、NY市場のダウ平均の動きから「波の原則」を見つけ、初期のエリオット理論を展開しました。これがエリオット理論の始まりです。しかし、当時はこの理論にフィボナッチ級数などの数字の裏付けはなく、それぞれの波の特徴なども明確になっていなかったため、市場の分析方法としては認知されていませんでした。彼が発見したのは、上昇(下降)トレンドは5波動で構成され、そのトレンドが終了すると3波動の調整が入るということだけでした。

2.(エリオット理論の確立)

しかし、1978年ごろにA.J フロストとロバート・プレクターがそれぞれの波の特徴を解明し、フィボナッチ級数を波の振幅の計算に取り入れることによって、エリオット理論を体系付けることに成功しました。彼らが確立したエリオット理論は、1980年代に脚光を浴び、現在では米国の大学での授業にも取り入れられ、機関投資家の間では主要なテクニカル分析方法となっています。

3.(エリオット理論の欠点とF-エリオット分析)

しかしながら、現存するテクニカル分析のほとんどがそうであるように、エリオット理論もまた大きな欠点を内包していま

す。それは、この理論には時間の概念がないということです。つまり、エリオット理論では、波のカウントを間違えない限り、現在のトレンドのおおよその到達価格は計算できますが、いつ到達するのか、やいつごろからトレンドが変わるのか、などの時間の計算が出来ないのです。

そこで、私はこの時間の問題を解決するためにあるサイクルを発見し、このサイクル(日数)をエリオット理論に組み合わせることによって、エリオット理論で計算された高値や安値がいつごろ示現するのかをあらかじめ計算することに成功しました。

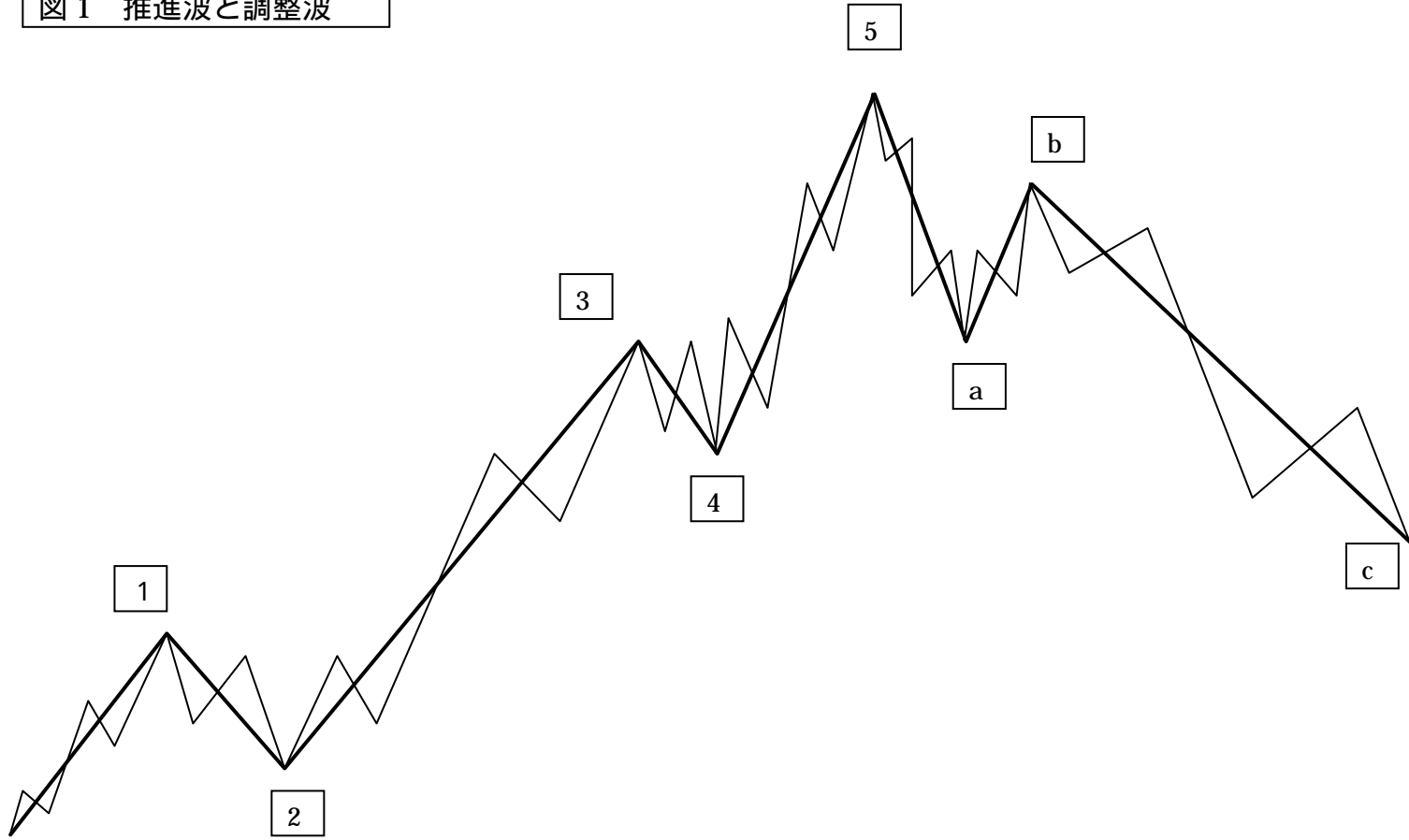
しかし、このサイクルをエリオット理論に組み合わせた分析(F エリオット分析と呼んでいます。)でも、その正確性は70%程度であり、30%程度は波のカウントを間違えたり、時間の推移を間違えたりします。それでも、70%程度が正確であるならば、投資の世界においては間違いなく成功者となるでしょう。

4.(エリオット理論の基本)

(相場は全部で8つの波動で構成される。)

エリオット理論では、相場は推進波5波と高値(安値)実現後の修正波3波の合計8波で構成されていると考えています。上昇(下落)トレンドが始まると、1、3、5波目がそのトレンドの推進波となり、2、4波目が修正波となります。また、トレンドが終了すると、それまでのトレンドとは逆方向の修正波が発生します。この修正波ではa、c波が推進波であり、b波が修正波となります。(図1参照)

図1 推進波と調整波



1、3、5 波が上昇トレンドにおける推進波
a、c 波が調整局面における推進波

2、4 波が上昇トレンドにおける修正波
b 波が調整局面における修正波

(各波の特徴)

エリオット理論では相場は8波動で構成されますが、その8波動の波はそれぞれに違った性格を有しています。この各波の性格や特徴を発見し解明したことがエリオット理論を人気化させた理由だと筆者は考えています。

第1波

それまでの下落(上昇)トレンドが終了したのではないか、との心理が働き、それまでに売り建てていた(買い建てていた)ポジションを解消する動きが表れます。また、ボトム(トップ)をつけたのではないか、との心理も働き、買い建て(売り建て)の新規ポジションを作る動きも表れます。

しかし、ファンダメンタルズには未だ状況が転換した証拠が見られない上、新規ポジションを建てた投資家に自信がないので、すぐに利益を確定しがります。また、出来高も少ないことが多く、短期間の上昇(下落)で終了することが多いのも特徴です。

この第1波は内部に5波動の波を含みます。

(みずほHD株の昨年5月から7月までの上昇局面がこれに当たります。)

第2波

第1波が始まる前の下落(上昇)トレンドは未だ終わっていないのではないか、との心理が働き、第1波の上昇を打ち消す動きが出ます。ここでは主に第1波で作られたポジションが解消され、一度売りポジションを解消した投資家の再度の売りポジション作りも入ります。

通常は第1波の上昇幅の61.8%修正値までに下げを完了しますが、状況によっては上昇分を100%打ち消す動きになることもあります。

この第2波は内部に3波動の波を含みます。

(昨年7月初めから8月初めまでのみずほHD株の下落がこれに当たります。)

第3波

第1波以前の下落(上昇)トレンドが終了していることに投資家のほとんどが気づき、ファンダメンタルズの転換を示唆する数字が表れて上昇(下落)トレンドが明確になります。

第1波以前に作られた売り(買い)ポジションや第2波で作られた売り(買い)ポジションのストップ・ロスが発生しやすく、先物などにもプレミアムがつきやすくなります。新規に買い(売り)ポジションを作る投資家が表れ、出来高も増加します。また、ファンダメンタルズの改善(悪化)を示す数字が次々に発表されるため、投資家が利益の確定を急がなくなり大きな値幅が発生します。

一般的に、推進波の中ではこの第3波はもっとも長く、力強い上昇(下落)トレンドになります。

この第3波は内部に5波動の波を含みますが、場合によっては内部の3波目が大きくなることがあります。(これをエクステンション(拡張)と呼びます。)

通常は、第2波の下落幅の1.382倍~1.618倍の値幅が発生しますが、エクステンションが発生すると2.618倍~4.236倍になることがあります。

(昨年8月初めから10月初めまでのみずほHDの上昇がこれに当たります。)

第4波

第3波の買い(売り)ポジションの利食い売り(買戻し)と第3波に乗り遅れた投資家の買い(売り)が交錯する場面です。心理状態は強気(弱気)のままですので、利食い売り(買戻し)もそれほど多くなく、出来高は第3波ほど盛り上がりません。この波は内部に3波動の波を含みます。

基本的には、第2波の調整幅が大きくなることが多いため、第4波の調整幅はそれほど大きくなることはありませんが、第2波の調整幅が小さかった場合は、第4波の調整幅は大きくなります。また、第2波が単純な形状の調整になった場合は、第4波は複雑な波になることが多いようです。(これをオルタネーション(交互)と呼びます。)

第4波の調整は第3波の上昇(下落)幅の38.2%~61.8%に収まることが多いですが、第2波の調整幅が小さかった場合は100%になることもあります。

(昨年 10 月から 11 月までのみずほ HD の調整がこれに当たります。この調整が単純だったのは 2 波目が複雑だったからです。)

第 5 波

上昇(下落)トレンドの最終局面です。誰もが現在のトレンドが正しいものであると確信しており、悪材料が出てきても無視します。ほとんどの投資家が同じ方向のポジションを抱えており、弱気(強気)な話をする者がいなくなります。短期間でドラマチックな上昇(下落)を見せることが多く、投資家はこの波の時に楽観(悲観)の極限に達します。

この波は内部に 5 波動の波を含みます。この波もエクステンションすることの多い波です。

第 5 波の上昇幅は、第 4 波の下落幅の 1.618 倍に収まることが多いですが、状況によっては第 3 波全体の上昇幅の 1.618 倍以上の上昇を見せることがあります。

(昨年 11 月から今年 4 月までのみずほ HD の上昇がこれに当たります。第 5 波はエクステンションしました。)

a 波

それまでの上昇(下落)トレンドに疑問を感じる投資家が表れたり、それまでのファンダメンタルズに変化が生じたり、第 5 波で無視された悪材料が認識されたりして、利食いを急ぐ投資家や反対のポジションを作る投資家が表れます。すでに第 5 波の上昇(下落)過程でほとんどの投資家が同じポジションを抱えているので、新規の買い(売り)が入りにくく、短期間で大きな下げ(上げ)になります。

基本的には a 波は内部に 5 波動の波を含んでいますが、下げ(上げ)が急激なため、一直線の下げに見えることが多いようです。

(今年 4 月から 5 月までのみずほ HD の下げがこれに当たります。)

b 波

以前のトレンドへの巻き返しが起こる時の波です。a 波の急落によって「高値覚えの値ごろ感」が台頭し、もう一度ぐらいは

リバウンドするのではないかとの心理や以前のトレンドは未だ終わっていないとの心理が働き、投資家が再び強気になります。「ナンピン買い(売り)」や以前と同じ方向へのポジション作りが入り、戻りは大きくなり易いですが、結局第5波の高値(安値)を上回ることはありません。また、出来高はあまり多くなりません。

このb波でのナンピン買い(売り)や信用買い(売り)が次のc波の下落を長く大幅なものにします。このb波は内部に3波動の波を含みます。

戻り幅は、通常の場合a波下げ幅の61.8%以下ですが、場合によっては100%に及ぶこともあります。

この波も複雑な形状になることが多く、このため戻り売りや利食いのタイミングがとりにくくなります。

(5月安値から6月末までのみずほHDの反発がこれに当たります。)

c波

第3波の推進波の時と同じように、ほとんどの投資家が以前のトレンドが終了してしまっていることを認識します。このため多くの損切りが発生し、出来高も増加します。再び強気(弱気)になるまでに時間がかかるので、買い(売り)が入りにくく、修正波の中ではc波が最長になることが多いようです。

このc波も内部に5波動の波を含みます。

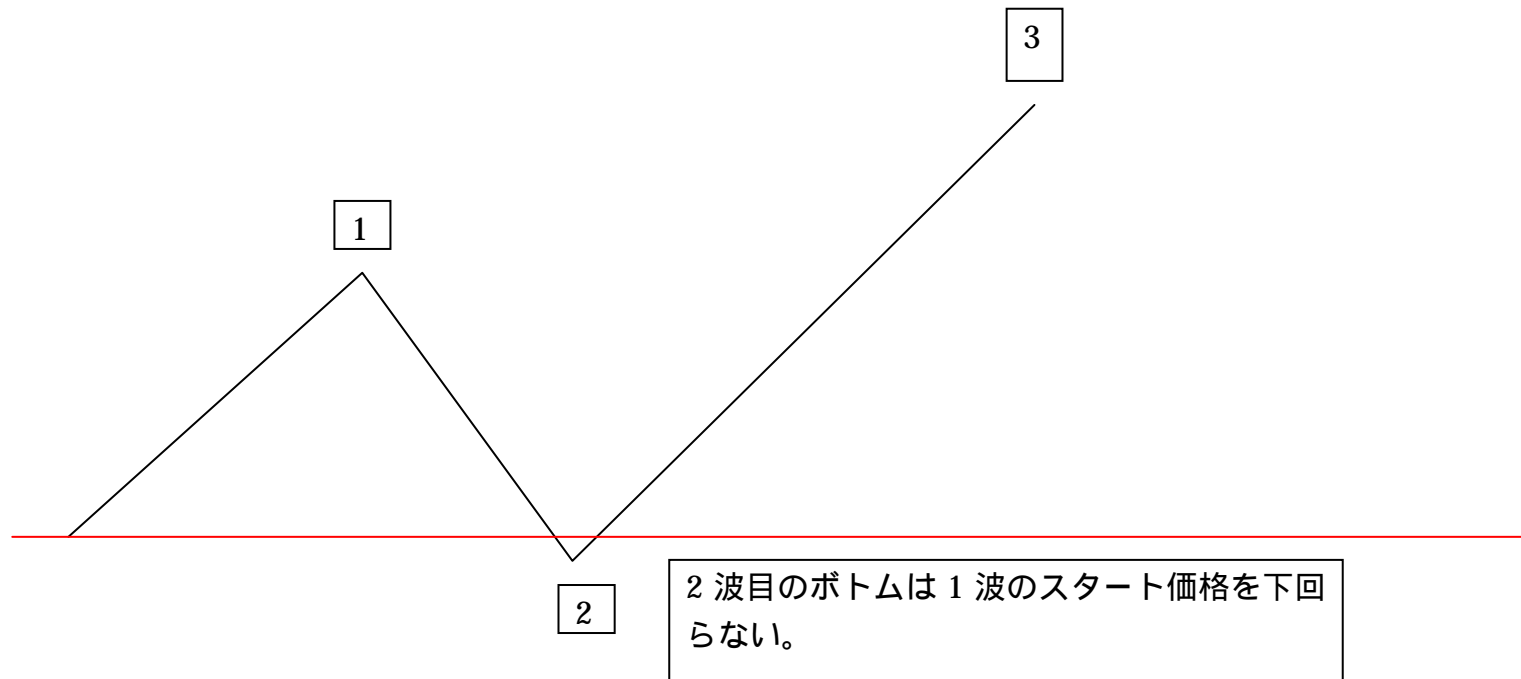
下げ幅は以前のトレンドの第1波から第5波までの上昇幅の50%~61.8%に及ぶことが多いですが、最低でも38.2%程度は下落(上昇)します。

5. エリオット理論におけるルール

エリオット理論では、重要な3つのルールが決められています。

(ルール1)

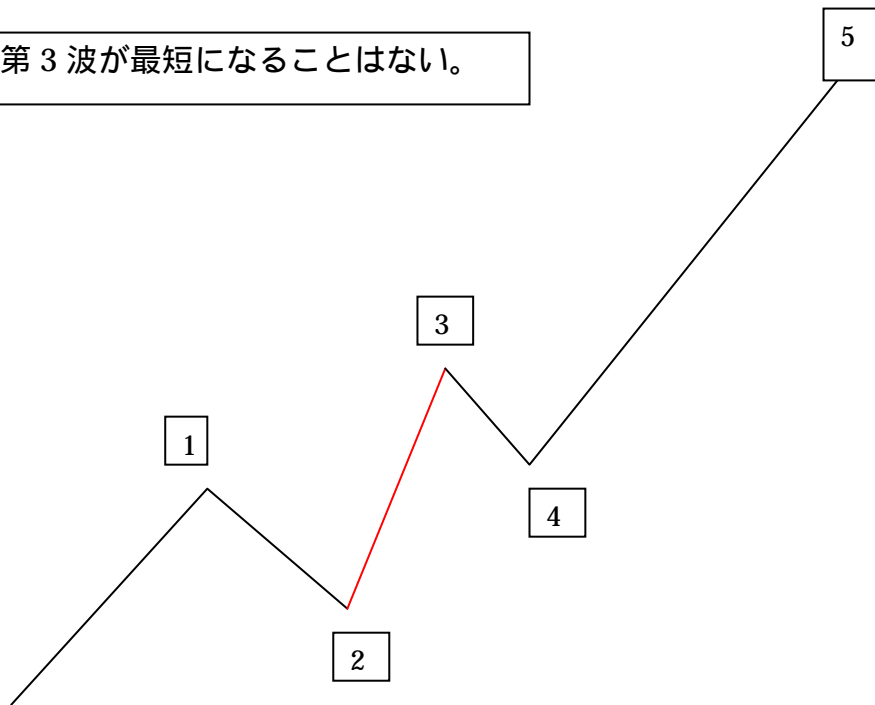
第2波の修正のボトム(トップ)が第1波のスタート価格を下回る(上回る)ことはない。もし、このような状況になったのであれば、それは分析におけるスタートの価格を間違えていることになる。



(ルール 2)

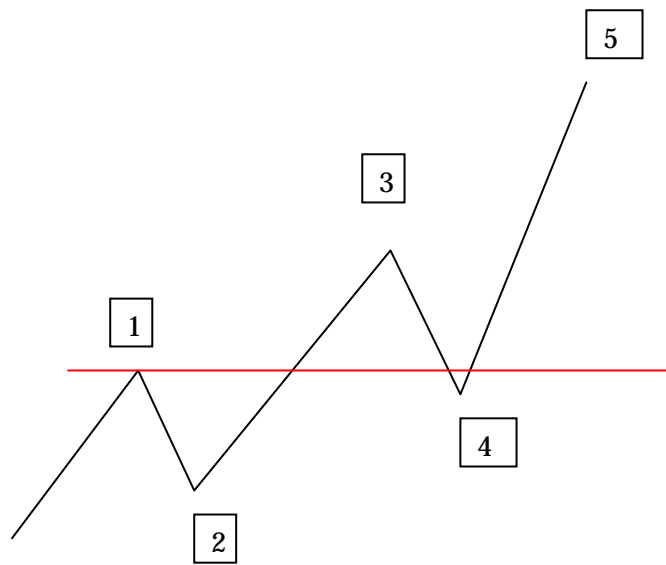
第 1 波、第 3 波、第 5 波の推進波の中で第 3 波が最短になることはない。もし、第 3 波が最短になるのであれば、それは第 3 波のスタート価格を間違えていることになる。

第3波が最短になることはない。



(ルール3)

第4波の修正波のボトム(トップ)が第1波のトップ(ボトム)を下回る(上回る)ことはない。もし、このような状況になるのであれば、それは全体の波のカウントを間違えていることになる。



第4波のボトムが第1波のトップを下回ることはない。

ここまでがエリオット理論の基本中の基本です。エリオット理論における各波の特徴や性格をよく理解し、現在の相場に当てはめて波のカウントを間違えなければ、ほとんどの場合は相場に勝てることになります。

6. 万能ではないエリオット理論

しかし、こうした基本を裏切るような動きを時々見せるのが相場です。そうしたイレギュラーな動きさえもエリオット理論で説明しようとしたのがロバート・プレクターです。

80年代に彼の元に多くの後輩があつまり、エリオット理論を万能にしようとする動きがありました。そして、先にご紹介した3つのルールを破る動きが相場に出てくる場面があるのを目の当たりにした彼らは、ルールを破る動きを「様々なイレギュラー（特別な事例）」と呼んだのです。

その結果、エクステンション、ダブル・エクステンション、フェイリュアー（未達）、トライアングル調整、ダイナゴル・

トライアングル調整、上昇ウェッジ調整、下降ウェッジ調整、フラット調整、ジグザグ、ダブル・ジグザグなど多くのイレギュラー理論が追加されました。(こうした動きについてお知りになりたければ、エリオット分析の本をお買い求めください。)

筆者は、こうしたエリオット学派の方が東京で講演をされた時に、彼らに質問してみました。

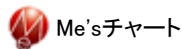
「エクステンションが起っているときに、それがエクステンションであるといつ認識できるのでしょうか?」と、すると、彼らは少し困った顔で、

「それは推進波の長さが大きくなったと感じたときです。」と答えました。つまり、後になってみないと分からないということです。後で相場を分析するのであれば、世のほとんどのテクニカル分析は万能といえるでしょう。

こうしたやり取りやエリオット理論の研究の結果、筆者がたどり着いたのはファンダメンタルズを分析してエリオット理論に当てはめることです。これによって、ある程度は波のカウント間違いを回避できます。また、その波での投資家の心理状態がどこまで持続可能なのか、という問題はサイクルを当てはめることによって解決可能です。

このサイクルの計算方法は現在でも企業秘密ですのでお教えできませんが・・・

(以下のチャートは Me ネット証券のチャートを使用しております。)



印刷

検索を実行

● コードor銘柄名 8411

○ 指数 日経平均

分析情報

[使い方](#)
[説明](#)

[画面が表示されない](#)
[お客様へ](#)



当サイトの著作権はMeネット証券に属し、許可なく第三者への再利用及び再配信等を行うことを固く禁じます。サイト内の情報に関しては万全を期してはいますが内容を保証するものではありません。万一この情報に基づき被った損害についてMeネット証券及び当サイトへの情報提供者は一切の責任を負いません。当サイトに掲載されている事項は、Meネット証券及びその関係会社のご案内のほか、株式・投資信託等投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、投資の勧誘を目的としたものではありません。最終的な投資の意思決定は、お客様ご自身の判断でなされるようお願いいたします。なお、予告なしに内容が変更または廃止される場合がありますが、あらかじめご了承ください。